コラム
Column
きのうきょう

「顔の見える交流」相互理解の一歩

～訪韓団参加を振り返って

文&写真　学生記者
中里真侑（文学部3年）

私は、3月5日から3月14日に実施された、日韓文化交流基金主催の大学生訪韓団第１団に参加した。参加した理由は、外交や歴史問題などでしばしばニュースに取り上げられることも多い韓国という国について、さまざまなメディアにあふれている情報からはうかがい知ることのできないことを、実際に現地へ行くことで知ることができればという思いからであった。

10日間という日程の中で、まるで韓国を横断するかのようにさまざまな都市を訪れた。北東部・江原道の都市、春川（チュンチョン）でのホームステイ体験や江原道楊口(ヤング)郡庁表敬訪問、南北軍事境界線・第4トンネルの視察など、非常に貴重な経験をさせていただいた。そのなかでも日韓関係について考察した現地の大学生との交流について具体的に述べたいと思う。

韓国の大学生たちとは計3回の交流の場があった。ソウル近郊の韓神大学、春川の江原大学、釜山の釜慶大学の3大学で交流会がそれぞれ開かれ、お互いの国の魅力紹介のほかに、日韓関係や文化に関すること、外国人労働者の問題や就職事情など幅広いテーマでディスカッションを行った。３回とも、日本側の学生を合わせて、各60～80名が参加した。

韓国の学生とディスカッション

交流した大学生たちは日本のアニメや漫画、ドラマなどの文化に興味を持っている人たちが多く、会話も弾んだ。一方で、慰安婦や徴用工をめぐる歴史問題や政治に関することを話し合ったときは、「日本は謝罪すべきだ」と真剣な面持ちで主張され、両国間の認識の違いや、意見の差異が露呈したこともあった。やはり歴史にかかわる問題は繊細であるということを痛感させられた。一方で、日本の魅力紹介を通して「今まで日本に行ったことはないが、日本に行きたく

韓神大学で行われた日韓の学生によるディスカッション。幅広いテーマで意見を交わした

なった」といった声も聞かれ、有意義な情報を伝えられたという満足感も得られた。

ディスカッションの中で最も印象的だったのは、文化と歴史や政治の問題を分けて考えていると発言する韓国の学生が多数いたことである。日本では、一部の人たちの中で、文化や歴史、政治などをすべて同じ括りでとらえ、韓国に良いイメージを持っていない人たちが少なくないように感じる。私自身、これまで日韓関係については知識もなく、あまり意識もしていなかった。しかし、ディスカッションの中で自国の歴史や政治、日本との関係性について自分の考えを積極的に発言する韓国の学生たちの姿を見て、私は今後目指していくべき日韓の関係性というものを強く意識し、自分には何ができるのかということを深く考えるようになった。

政府間の日韓関係は戦後最悪とも言われている状況下ではあるが、日本に興味を持つ韓国人は決して少なくないということを現地の学生たちとの交流の中で知ることができたのは大きな発見であった。訪韓団を通して出会った韓国人の学生たちとは、短い時間ではあったが、話し合いを通じてお互いの意見を尊重し、よい関係を構築することができたと感じている。ホストファミリーや一部の韓国人学生とは今でも連絡を取り合っており、小さなコミュニティーではあるが、友好な関係を築くことができている。

多くの出会いに感謝

訪韓団を経て、「韓国」「韓国人」という一括りで考えるのではなく、対個人で接する“顔の見える交流”が相互理解の一歩になるということを学んだ。これらのことを踏まえて、今、私ができることは、訪韓団を通じて築いた関係性を継続していくこと、そして日韓交流を通して得た学びや自分の考えを積極的に発信していくことだと考えている。

日本と韓国は地理的にも文化的にも隣国であり、今後のグローバル社会において両国の相互協力がより重要になってくる。お互いの理解を深めるためにも、より積極的な民間交流の展開とその継続が、2国間の友好関係の構築につながっていくのではないかと思う。

最後に、今回の訪韓団に参加したことで、たくさんの素敵な出会いがあった。10日間一緒の時間を共にした訪韓団第１団のメンバー、韓国で引率など様々なサポートをしてくださった方々、韓国語が話せない私を受け入れもてなしてくれたホストファミリー、今回の訪韓に関わってくださったすべての方々に感謝の気持ちを伝えたい。